百鬼拾遺序

画師石燕隠老也性質温雅庭成下簣之功池引九仞之泉而春紅聞睍睆宴涼張沂樂焮水流荻花冬雪群闘四時耽此樂事而不知老之將至也惟至同好者欣然烹茶勉然談画既下筆直足成百

餘圖弈玄勝手以賞矣由此夢
子益衆成編且多皆世之所咲也
丙申春著百鬼夜行已亥歳後編
繼出而前後百鬼全焉今茲辛丑
春書肆某又来請繼冥之圖而欲
以剞之隱老笑曰多圖之則不啻
損心力而取譏千載但恐鬼哭夫

如之何書肆曰画工元是畫無類
之心合有道之器若夫画栗鬼哭
亦骨力所至而尚佳事也強請莫
辭於是無已而探怪聚妖而為三
巻題百鬼拾遺問序於余以不
才辭隱老曰負俗之圖為嬰兒之
戯而已不才而且作序則是一怪

事也因妄固陋而書其端矣

安永十年辛丑春

元洲　滕武幹

和哥ハあめつちをうごかし 是ハ目に
見へぬ鬼がみをも繪書をも筆にて行
はくあやまてその種ハしききさあかし
をとイ至うくいれひろ節をかしぬ世と
の文枝よりも色ある川かよしくみとめなめ

ゆるを書肆某いへる嬰児のむつ
かるをとめんハ志つかよ里ハおしきさかふ
乞イまうせぬれハ松か里一書の勇
ましきふあつひとまち嘉佑めやくと
やゝ櫻木にのとる事とはなりぬ
安永九のとし蠟月

石燕自序

百鬼夜行拾遺上之巻目録

蜃氣樓

史記の天官書にいはく
海旁蜃氣ハ樓臺に象ると
蜃とハ大蛤なり海上に氣をふきて
樓閣城市のかたちをなすこれを蜃氣樓と名づく又海市とも云

燭陰
山海経に曰
鍾山の神を
燭陰と云
其のたけ千里
そのかたち人面
龍身にして
赤色なり
と
鍾山ハ
北海の
地なり

人面樹
山谷にありその花人の首のごとし
ものいはずしてたゞ笑ふ事しきり
なりしきりにわらへバそのまゝ
落花すといふ

人魚
建木の西にあり人面にして
魚身足なし胸
より上ハ人にて
下ハ魚に似たり是
氐人國の人なり
とも云

返魂香
漢武帝李夫人を寵愛しおはしゝに夫人みまかりおはしゝが思念しきりにやまずして方士に命じて返魂香をたきしむ夫人のおもかげ髣髴として烟のなかにあらはる武帝ますますかなしみて詩をつくりたまふ
是耶非耶立而望之
偏娜々何冉々
其来遅

彭侯

千歳の木にハ精あり状黒狗のごとし尾なし面人に似たり
又山彦とハ別なり

天狗礫

凡深山幽谷の中にて一陣の魔風おこり山鳴谷こたへて大石をとばしける事ありこれを天狗礫と云

左傳にみえたる宋におつる七つの石もこのたぐひハ隕なるらんし

道成寺鐘
真那古の庄司が娘
道成寺にまいりし安珍が
つり鐘の中にかくれ居たるを
追ひて蛇となりて その鐘をまとふ
その鐘とけて湯となるといふ
或曰 道成寺の鐘ハ今京都
妙満寺にありて その縁起の
ごとし
紀州日高郡矢田庄
文武天皇勅願所 道成寺冶鐘
勧進比丘別当法眼定秀 檀那
源万寿丸 并 吉田源頼秀 合山
諸檀越男女大工山願 道願 小
工大夫守長 延暦十四年乙亥
三月十一日

燈臺鬼
軽大臣遣唐使たりし時唐人大臣に唖になる薬をのませ身を彩り頭に燈臺
をいたゞかしめて燈臺鬼と名づく其子弼宰相入唐して父をたづぬ燈臺鬼
涙をながし指をくひ切り血をもつて詩を書して曰
我元日本華京客　汝是一家同姓人
為子為爺前世契　隔山隔海変生辛
経年流涙蓬蒿宿　逐日馳思蘭菊親
形破他郷作燈鬼　争皈旧里寄斯身

泥田坊

むかし北國に翁あり子孫のためにいさゝかの田地をかひ置て寒暑風雨をさけず時々の耕作おこたらざりしにこの翁死してよりその子酒にふけりて農業を事とせずはてハこの田地を他人にうりあたへければ夜な夜な目の一ツあるくろきもの出て田かへせ田かへせとのゝしりけりこれを泥田坊といふとぞ

古庫裏婆
僧の妻を梵嫂といへるよし
輟耕録にみえたり ある山寺に
七代以前の住持の愛せし
梵嫂その寺の
庫裏にすみて
檀越の米銭を
かすめ新死の
屍の皮を
はぎて
餌食とせしとぞ
三途河の奪衣婆
よりもおそろしく

白粉婆

紅おしろいの神を脂粉仙娘と云おしろいばゞハ此神の侍女なるべしおそろしきものまハ其の月夜女のけはひとむかしよりいへり

蛇骨婆

山海經ニ巫咸國ハ女丑
の北にあり右の手に青蛇
をとり左の手に赤蛇をとる
人ありといへり蛇骨婆ハ
此國の人か或説云
蛇塚の蛇五右衛門と
いへるものゝ妻なり
よりて蛇五婆を
よびしを誤りて
蛇骨婆といふと
未詳

影女
ものゝけある家には月かげに女のかげ障子にうつるとかや
荘子にも罔両と景と問答せしことあり
景ハ人のかげ也罔両ハ景のそばにある微陰なり

倩兮女
楚の国宋玉が東鄰に美女
あり墻にのぼりて宋玉をうかゞふ
嫣然として一たび笑へば陽城の
人を惑せしとぞおよそ美色の
人情をとろかす事
古今ためし
多しけらけら女も
朱唇をひるがへして多くの
人をまどはせし
淫婦の霊ならんか

煙々羅

しづが家のいぶせき蚊遣の煙むすぼゝれてあやしきかたちをなせりまことに羅の風にやぶれやすきがごとくなるすがた

あれぞ烟々羅とハ名づけゝらん